

男性複数生格語尾について

千葉 萌 一 郎

Об окончаниях в родительном падеже множественного
числа мужского рода.

Хоитиро Тиба

古代ロシア語名詞変化組織における最も著しい特徴は、種々な変化タイプ数の減少と、これ等タイプの形態の接近とであった。

-Ō 語幹と -Ū 語幹の相互作用は、何よりも古かった。それは未だ原スラブ語期に、-Ō 語幹ならびに -Ū 語幹のそれぞれの単数主格・対格形が一致していたからで、この結果同一の名詞が他の格及び数において、いずれかの変化形態に動揺を見せた。

古代ロシア語における -Ō, -jŌ 語幹男性名詞複数生格語尾は -ъ, -ь で、その単数主格・対格形と同形であった、вълкъ, столъ, конь. а ис конь изъ своихъ (Духовная Симеона Гордого, 1353年)。語尾 -ъ, -ь はその弱い位置で音価を失い、零語尾となった、человек, глаз。この状況は重要な複数生格の機能を弱め、望ましいものでないことは当然であった。このような背景のもとに、初め -Ō 語幹に部分的に、-Ū 語幹男性名詞複数生格語尾 -ов が現れ、やがて全面的に -Ō, -jŌ 語幹の古い複数生格形態を圧迫するにいたった。

語尾 -ов が古い形態に代って滲透したのは、主として複数生格の古い形態が、使用の上で単数主格の形態と合致するところであった。

現代標準ロシア語においては、語幹が硬子音で終る男性名詞、ならびにすべての形態において、あるいは複数においてのみ語幹末に -j- の現れる男性名詞の多数が、複数生格語尾 -ов を持っている。столов, домов, городов, концов, краёв。正字法的には -j- の場合は常に, ц の場合は語尾にアクセントが無い場合のみ -ев が現れる, пальцев, сараев, стульев。

-Ō 語幹と -Ū 語幹の統合以後のかなり早い時期に、-jŌ 語幹及び -Ī 語幹それぞれの男性名詞変化形態の統合が始まった。いずれのタイプにおいても原スラブ語期には、単数主格・対格語尾は -ь であった。-Ō 語幹と -Ū 語幹の統合に比べて -jŌ 語幹と -Ī 語幹の統合の開始が一段と遅れたのは、共に -ь に終りつつもそれぞれの変化形態が原初において、完全に一致していなかったことに起因する。つまり、-jŌ 語幹においては語尾母音の直前に軟子音があったのに、-Ī 語幹においては半軟子音があった。完全な一致を見たのは、前母音 -ь の直前に生じた第2次軟化以後のことであった。

-Ī 語幹名詞は通常単数において、-jŌ 語幹の変化形態を受入れた。しかし、複数においてはこれに反し、原初において -Ī 語幹を特徴づけた語尾が、-jŌ 語幹に拡大滲透していった。例えば複数生格に次のような形態が認められる、пѣнѣзии (Новгородское евангелие, 1270年), безъ стихарии (Новгородская Кормчая, 1282年), моужии (Рязанская Кормчая, 1284年)。Лаврентьевская летопись には мечии, мужии, кнѣзии の形態が見られる。複数生格語尾 -ии は古代の -Ījb を反映したもので、それが現代の語尾 -ей を与えた, стихарей, мужей, мечей, князей。

要するに 男性名詞複数生格において、主動的役割を演じたのは $-\ddot{U}$ 語幹複数生格語尾 $-\text{ov}$ と、 $-\ddot{I}$ 語幹複数生格語尾 $-\text{ey}$ であった。語尾 $-\text{ov}$ は軟語幹と結合してバリエント $-\text{ev}$ を得、又 $-\text{ey}$ はその文語的、古代スラブ語バリエントとして $-\text{ii}$ 形態を保持した。 $-\ddot{U}$ 語幹複数生格語尾 $-\text{ov}$ は、基本的には $-\ddot{O}$ 語幹に、又 $-\ddot{I}$ 語幹複数生格語尾 $-\text{ei} > -\text{ey}$ は、 $-\text{j}\ddot{O}$ 語幹に拡大した。

これ等の語尾の果たした役割は大きかった。それは明らかに、複数生格の観念と結合していたからにはかならなかった。

しかしここで、どのような条件において、軟語幹複数生格語尾 $-\text{ev}$ 、あるいは $-\text{ey}$ が現れるのかという問題に立入らなければならない。この問題に関し、Л. А. Булаховский は大要次のように述べている。

конь, пахарь タイプの語は標準的形態として語尾 $-\text{ov}$ を持たなかった, коней, пахарей。これは $-\ddot{O}$ 語幹ではなく $-\ddot{I}$ 語幹の影響が、13 世紀以来明瞭に反映しているのである。比較：古代スラブ語 зятій, медвѣдий 等。ここでは、標準語において、 $-\ddot{U}$ 語幹から借用された語尾を持つ $-\ddot{O}$ 語幹の影響が見られないのは、 $-\ddot{I}$ 語幹における語尾の多くが、 $-\text{j}\ddot{O}$ 語幹語尾に似ていること、又 $-\ddot{U}$ 語幹の消滅が極めて早い時期であったことによるものと思われる。この結果、複数生格語尾 $-\text{ev}$ は、当然 $-\text{j}\ddot{O}$ 語幹に現れなければならなかった筈であるが、直接のモデルにはなり得なかった。硬変化の影響は、単に語幹末に $-\text{ц}$ を持つ語, молодой, купець 及び $-\text{й}$ を持つ語を捉えたのみであった。一見して奇異に思われるのは, ж, ш よりも遅れて硬化した ц で終る語幹が $-\ddot{O}$ 語幹の語尾をとり, ж, ш に終る語尾が軟変化の影響を蒙ったことである, ножей, ужей, шалашей, малышей。恐らくここで相異の現れた原因は、 $-\ddot{I}$ 語幹の $-\text{j}\ddot{O}$ 語幹に対する影響の道の狭さと具体性にあったものと思われる。 $-\ddot{I}$ 語幹の語の中には, ножь, сторожь に類する $-\text{j}\ddot{O}$ 語幹変化が類推し得た ж, ш に終る語があったにも拘らず, $-\text{ць}$ に終る語は存在していなかった。

このようにして、 $-\text{j}\ddot{O}$ 語幹において語尾 $-\text{ev}$ を持つ語は、それに近い他の語幹 — $-\ddot{O}$ 語幹の影響圏に突出されたものであった, молодцов, отцов, братцев, горцев。比較：古文献における чудотворцов, иноземцов, злочинцов。しかしながら方言においては, месяцев なる形態も見られ、このような形態は、軟 ц を保持する北方諸方言に特に拡大している。次のタイプの語についても前述したことと同様なことが言えよう, край — краёв, лентяй — лентяев, герой — героев, кий — киёв, поцелуй — поцелуев。語尾 $-\text{jb}$ ($-\text{й}$) を持った $-\ddot{I}$ 語幹名詞は、周知のように古代には存在していなかった。

男性名詞における語尾 $-\text{ov}$ の拡大は、すでに 11 世紀から 12 世紀にわたる文献に多数認められる。「Изборник Святослава, 1076 年」において, тѣхъ вождевъ, грѣховъ, пълковъ, бѣсовъ, трудовъ, монастыревъ。「Слово о полку Игореве」において, соколовъ, щитовъ。「Новгородские грамоты, 13-14 世紀」において, закладниковъ, оу коупцевъ, повозовъ не имати, оу новоторъжьцевъ, оу исьцевъ。

語尾 $-\text{ov}$, $-\text{ev}$ が幅広く使用されている「Домострой」の形態は示唆的である, боголюбцевъ, вандышевъ, волхвовъ грѣховъ。どのような理由によるのかこの文献には、零語尾の語が特異である。語尾 $-\text{ov}$ をとらない場合: алтынъ (пяти алтынъ не додашь), бояринъ (всех бояръ), разбойникъ (от разбойникъ), христианинъ (на своих христианъ, у своихъ християнъ), рабъ (и чада своя поучаетъ такоже и рабъ), человекъ (от члвкъ

хвалима есть).

少数の語は同一条件（定語及び同一前置詞の存在）において，零語尾と語尾 -ов との間に揺れが認められる，от всякихъ различныхъ недугъ душевныхъ と от многоразличныхъ нужныхъ и тяжкихъ недуговъ, от всякихъ грѣховъ удалятися と грѣхъ ради нашихъ. грѣховъ 形態は教会ならびに宋教に結びついているものの грѣхъ の形態の4倍も多く使用されている。このようにして，すでに16世紀には，零語尾及び語尾 -ов を持つバリエント形態の定着が見られるようになった。

しかし，必ずしもすべての男性名詞が語尾 -ов を得た訳ではなかった。それは複数生格形が組みこまれている，語の結合の条件によるが多かったと思われる。

いま，Л. А. Булаховский によるこれ等の条件の明解な分析に依拠しつつ，複数生格の古い形態が標準語に留まっている幾つかの条件を検討してみたい。

1. 語が双体を意味する場合。屢々《пара》の直後で使用され，複数生格形態を特に特徴づける必要が比較的すくない場合，глаз, сапог, чулок. 比較：古形，方言 глазов.

2. 語が尺度，重量等の概念に関係する場合，раз, аршин, грамм：много раз, пять аршин, шесть грамм. 19世紀初頭においては пуд 形態が標準的であった。А в те поры все важны в 40 пуд (А. С. Грибоедов). とは言え遙かそれ以前に пудов なる形態も知られていた ...с десяти пудов московских... (Уставн. грам., в списке, царя Феод. Иоанн. 1587年)。А. Х. Востоков はその《Русская Грамматика》において，десять пуд を標準的な形態と見做していた。この形態はその後も稀に認められる。例えば И. А. Гончаров の《Обрыв》に，Взвалил тысячи пуд себе на плечи とある。しかしながら20世紀初頭には пудов 形態のみとなった。

同様に два, три, четыре раз の形態が，方言において見られる。

古代ロシア語においては，零語尾形態の語が多かった。古文献ならびに18世紀の作家に次のような個所が見られる。И ту же бых 5 месяцев... (Хождение Афанасия Никитина. 約1475年)。И удержали меня в Самборе пять месяц (Памятники древней русской письменности, относящиеся к Смутному времени. СПб. 1909年)。болиши трех месяц (Уложение. 1649年)。без рог (Г. Р. Державин. 1743-1816年)。глубже восьми фут, とは言え по пяти футов もある (Петр I の言葉の中で)。Стадія, мѣра о 125 шаг. (Н. Г. Курганов. 18世紀)。ポーランド語からの借用語 фунт は，語尾 -ов とのみ用いられていたがその理由は今にしても明らかでない。...по 10 тысяч фунтов золотых (И. И. Срезневский. Материалы для словаря древнерусского языка по письменным памятникам)。часов に関しては，恐らく語尾 -ов は，この語が過去において -ŭ 語幹に方言的に帰属していたせいであろう。рядов についても同様に推定される。複数生格語尾 -ов を持たない вершок が存在しない理由は，この形態において語尾 -ов を持った多数の語と聯合する，接尾辞 -ок との關聯において捉えなければならない。その特別の場合は次項に挙げる。

3. 接尾辞 -ок, -ек を持つ若干の語の場合。зубок — 複数生格 зѹбок, рожок — 複数生格 рѹжек, глазок — 複数生格 глазок, сапожок — 複数生格 сапѹжек. рожок, глазок, сапожок は双体を意味する。これ等の複数生格は単数主格と，アクセントの位置により明確に区別される。

4. 部隊等に関する古い名称の場合。гусар, драгун, кирасир, солдат. これ等の語は一

部 2. に挙げた概念に平行すると考えられる。ごく普通の語結合は полк солдат, эскадрон гусар, рота кирасир 等で, партизан もこれに類する。のみならず, 古い рейтар, 更には гусар に類する接尾辞 -ар を持つ語は, 多数の次のタイプ, 即ち татары — 複数生格 татар, болгары — 複数生格 болгар の類推を蒙った事実は見逃せない。ここで語尾 -ов が拡大しなかったのは, 単数主格において接尾辞 -ин を持っている, その特殊性によるものである。

5. 民族の名称の場合。ここでは言うまでもなく, 単数主格において接尾辞 -ин を持ち, 複数生格において零語尾を持つ子音語幹名詞群の影響を蒙ったのは決定的である。славян, римлян, египтян, татар, болгар. 古代ロシア語において Две сотни костромичь дворян и детей боярских (Материалы для истории возмущения Ст. Разина, собр. А. Поповым, М., 1857 年)。単数主格は костромитин である。なお, башкир, бурят, турок, цыган の場合と, калмыков, киргизов, монголов, таджиков, корейцев, китайцев の場合があって統一がない。

6. アクセントが単数主格と複数生格において異なる複数生格 волос の場合。古語及び民衆語においては волосов 形態も認められる。Ино силы с пашами под вас прислано больше волосов на главах ваших (История об Азовском осадном сидении донских казаков. 17 世紀)。Волосов は 19 世紀 10 年代の作家 Н. А. Полевой 等にも屢々見られる。

7. 複数生格 человек は, 数詞及び数量代名詞の直後においてのみ現れる, пять человек, несколько человек.

8. 語尾及び文法性に, 古くから話し言葉に動揺が見られた若干の借用語の場合。апельсин, фрукт, мирт. 古来の話し言葉は апельсина, фрукта, мирта であった。比較: апельсинов, фруктов, миртов.

9. 19 世紀後半に губ の影響により зуб なる形態が屢々現れた。

10. 成句的用法に меж двор がある。...и жены и дети скитаются тут же в Агенсеевской вотчине меж двор (Судное дело, 1648 年)。

11. 異なる複数生格形態により語義の相異を示す。кадет は воспитанники военного училища в царской России で, кадетов は члены политической партии である。

12. 異なる複数生格形態により文体のバリエーションを示す。солдат は標準語であるが, солдатов は俗語である。Академия の «Грамматика русского языка» т. 1. に А. А. Фадеев の «Молодая гвардия» からの次のような引用がある。1. В противном случае ему предлагалось снять с погон серебряные молнии и пойти в солдаты。2. Совсем недавно был опубликован приказ о введении в армии для рядового и офицерского состава и для генералов погонов, и это занимало всю армию。この引用における погон 及び погонов は, 文体的な相異を示している。погонов は文語的であるのに, погон は簡潔, 省略を旨とする口語に固有である。5 килограмм картофеля, 400 грамм масла は口語であるが, 紙面には 5 килограммов, 400 граммов の形態で現れる。又, 諺 Бодливой корове бог рог не дает. における рог は古形であり, 又, без сапогов は俗語である。

複数生格において改変を蒙ったのは単にロシア語だけではなく。白ロシア語においては新らしい語尾 -ов が, 最終的に古い形態を駆逐してしまった, сылда́тоў, гла́зоў, дзесяць разоў, кане́ў, рублёў, мещано́ў, татаро́ў. それはウクライナ語においても同様であった, ві́трів, зубі́в, разі́в, дні́в, старці́в. 但し, -ан, -р 語幹は古い形態を保持し, мі́щан, сла́в'ян,

татár, 又, 数詞, 数量代名詞と共に使用されて古い形態が残された, сто вóрог, шість день, сто раз, приятель мало.

参 考 文 献

- АН СССР. Ин-т русского языка. Грамматика русского языка. т. 1. М., Изд-во АН СССР, 1960.
- Борковский В. И. и Кузнецов П. С. Историческая грамматика русского языка. М., Изд-во АН СССР, 1963.
- Булаховский Л. А. Исторический комментарий к русскому литературному языку. Киев, “Радянська школа”, 1958.
- Добромыслов В. А. и Розенталь Д. Э. Трудные вопросы грамматики и правописания. Вып. 2. М., Учпедгиз, 1960.
- Соколова М. А. Очерки по исторической грамматике русского языка. Л., Изд-во ЛГУ, 1962.
- Черных П. Я. Историческая грамматика русского языка. М., Учпедгиз, 1954.
- Шахматов А. А. Историческая морфология русского языка. М., Учпедгиз, 1957.